

## ハプスブルク家 Habsburg

### ハプスブルク帝国 640年の歴史

ハプスブルク家のルーツは遠く13世紀に遡り、スイス東北部にあるライン河上流域に根拠をもった地方の豪族でしたが、その名がヨーロッパ史上に明確に刻まれるのは、一族の始祖と言われるルドルフ1世が1273年に神聖ローマ帝国の皇帝に選出されてからのことです。

以来、ハプスブルク家は中世ヨーロッパのあまたの名家と婚姻により結ばれ、その家領は時代と共に変遷するものの、オーストリアを核としたブルゴニー、ドイツ、ベルギー、イタリア、スペイン、ハンガリー、ボヘミアに及び、1918年までの約640年間ヨーロッパの大半を支配下におさめ、その間の約5世紀のあいだ神聖ローマ帝国の皇帝の地位を占めました。それだけに、現在に至るヨーロッパの政治、経済、文化、学問などのあらゆる分野に、ハプスブルク家は深く関わり、影響を与え続けて来たのです。

オーストリアの旅は、首都ウィーンはもちろん地方に点在する古都、牧歌的な狩猟地に至るまで、それはハプスブルク家の長い足跡を訪ねる歴史散策であり、珠玉の文化遺産を訪ねるカルチャー・トリップと言っても過言ではありません。さらに、ハプスブルク家が築いた多民族国家としての伝統が美食を食文化にまで高め、華やかな貴族社会がケーキやデザートのにぎやかな味覚を育み、ヨーロッパにコーヒー文化を広めた、サロンのなカフェの雰囲気とともに、世界のグルメや観光客を楽しませてくれます。

#### マキシミリアン1世 (1459—1519)

Maximilian I



「中世最後の騎士」と呼ばれるこの皇帝は、ドイツ王と神聖ローマ皇帝を兼任。ハンガリー勢力を駆逐して版図を拡大し、ボヘミア、ハンガリー王位継承権をも得ました。子供二人をスペインの王子・王女と、孫二人をハンガリーの王子・王女とそれぞれ二重に結婚させ、次代カール5世の「世界帝国」実現の礎を築きます。学芸の庇護者としても知られ、黄金の小屋根など、インスブルックにゆかりの場所が数多く残っています。

#### マリア・テレジア (1717—1780)

Maria Theresia



女帝マリア・テレジアは、後の神聖ローマ皇帝フランツ1世と結婚して16人の子供をもうけた「祖国の母」として今も国民に慕われています。父カール6世の死後、オーストリア女帝として即位。政治的手腕に秀で、教育制度の改革や産業の振興に努力しました。夫の死んだ1765年より長男ヨーゼフ2世との共同統治を始めますが、深い悲しみから生涯喪服を脱ぐことはなかったとされています。フランスのルイ16世に嫁ぎ、断頭台に送られたマリー・アントワネットの実母。

#### フランツ・ヨーゼフ1世 (1830—1916)

Franz Joseph I



オーストリア皇帝、およびハンガリー国王。即位当初は保守に徹していた皇帝も、後にはウィーン城壁を取り除いてリング通りをつくらせるなど、近代的な国造りに専念し、国民の敬愛を集めました。しかし、晩年は一族の非業の死が重なり、失意のうちに没します。それは多民族国家の強力な求心力を失うこととなり、帝位を継いだカール1世の努力もむなしくハプスブルク帝国が終焉を迎えるきっかけとなりました。

### オーストリアにおける 主なハプスブルク家ゆかりの地

